

諸達伺公報

陸軍省甲第三十一號(前號ノ續)
明治十六年陸軍士官學校幼年生徒入學志願者心得
第一條 本校幼年生徒ハ華士族平民中陸軍出身志願ノ者
(妻子ナキモノ限)檢査ノ上採用ス○第二條 幼年生徒
ハ入校ノ日ヨリ陸軍ニ從事シ決シテ他志ナキノ誓
約ヲ爲シム故ニ入校ノ後ハ自己ノ請願ヲ以テ退校又ハ
歸省スルヲ許サズ然レ病患ニテ卒業ノ目途ナキ者又ハ
修學中學術不勉強品行不正等ノ者ハ檢査ノ上退校セシム
ヘシ但官費生徒ニシテ學術不勉強又ハ品行不正等ヨリ退
校セシムル者ハ在校中ノ費用ヲ精價セシム○第三條 幼
年生徒ハ入校當日ヨリ官費生徒即チ戰死セル陸軍將校并
相等官ノ孤子(數子アルモ一名ニ限ル)ニ限リ衣服及ヒ一
切ノ費用ヲ官給トス但自費生徒ト雖モ諸品ノ調度ハ一般
制規アルヲ以テ官費生徒ト同シ支給シ其代價ヲ上納セ
シム(一月月金八圓ヲ、上納シ年度末ニ至リ過不足ヲ精
算ス)○第四條 自費入學者モ固ヨリ陸軍出身志願ノ
者タルヲ以テ身分ノ取扱總テ規則ニ依リ處分スルノ官費
生徒ノ異ナルヲ以テ○第五條 自費入學者ハ履修器具
書籍等ハ貸渡スト雖モ破損修理并ニ食料被服服用消耗品
等一切自辨タルヘシ○第六條 修學期限ハ三ケ年トス而
シテ此期限中全科卒業ニ至ラサル者ハ尙若干ノ年月ヲ延
期シ又ハ他ノ事故ニ依テ士官生徒ニ轉入シ得サル者ハ事
宜ヨリ一科ノ卒業生ヲ命シ更ニ五年間陸軍ニ從事セシ
ムルコトアルヘシ○第七條 幼年生徒志願者ノ檢査ハ士官
學校ニ於テ之ヲナス故ニ各地ニアル志願者ハ出京ノ上士
官學校ニ出願スヘシ但官費自費生共出京旅費ハ勿論滞在
日當及ヒ檢査不合格ニシテ歸郷セシムル者ノ旅費等總テ
之ヲ給スルコトナシ○第八條 入校志願者ハ第一號書式
ニ照準シ願書履歷書共正副二通宛士官學校ニ差出スヘシ
○第九條 總テ入學者命スル者ハ父兄親族等總テ一家ヲ
ナス身元健ナル者二名(在東京ノ者ニ限ル)ヲ以テ身元引
請人トシ官費ハ第二號自費ハ第三號書式ニ照準シ差出ス
ヘシ○第十條 身元引受人ハ第二及第三號入學證書式
中ニ示ス如ク生徒身上ノ儀ハ何事ニ依ラズ引受ヘキモノ
ナルヲ以テ假令ハ生徒修學中諸器具破損紛失シ自費ノ
際本人實力ニ不及時ノ如キハ必身元引受人ヨリ上納セシ
ムヘシ但引受人事故アリテ其引受ヲ辭スルモハ必身元代
人ヲ撰ミ府縣廳ニ與書ヲ以テ届出ヘシ (書式略ス)

叙任賞勳

八月二十日
任内務大書記官 內務權大書記官正六位 中村 孝禧
任内務少書記官 內務少書記官從六位勳六等 岡田 好樹
任內務權大書記官 內務權少書記官從五位 仙石 政固
任內務少書記官 內務少書記官從六位勳四等 檜垣 直枝
任內務少書記官
○明治十六年四月廿七日
任內務少書記官 元陸軍步兵兵曹長 須田 安貞
任內務少書記官 元陸軍歩兵軍曹 菊地 永章

時事新報

外國憲政使ヲ派出スヘシ
參事元老院ノ議官其他政府長上ノ官吏ガ民情觀察ノヲ
巡視觀察使トシテ數月來内地各地ヲ巡回シテアリシガ
大體ハ新ニ憲政復命シタル處ナリ各地ヨリノ報章ニ依リ
テ此處憲政ノ各縣内郡内ニ巡回シタルガ各地方ノ實情

上ニ直接間接ノ利益ヲ與ヘ又敗其チ加ヘタルヲ決シテ少
小ナラズ地方人民中ハ憲政使ノ來ルニ遇テ積年ノ鬱屈
ヲ慰メタル者モ必ラズアリタルナラント云ヘリ是等ハ遠
察使ノ巡回ニ依テ地方人民ノ榮リタル直接ノ利益トモ云
フベキモノニシテ隨分ニ廣大ナルモノナレバ憲政使ノ功
能ハ此等ノミニシテ盡ルニアラズ中央政府ハ此憲政使ヲ
以テ耳目ト爲シ全國ノ民情ニ付政治論ノ實況ニ付農工商
業ノ盛衰興廢ニ付道路運輸ノ便否ニ付學問教育ノ方向等
ニ付其未ダ聞カザル所ヲ聞キ未ダ見ザル所ヲ見、此ノ如
クナリト信置キタルモノ却テ彼ノ如ク、彼ノ如クナラ
ント想像シタルモノ却テ此ノ如クナルヲ知リ或ハ驚キ或
ハ悔ヒ或ハ憂ヘ或ハ安心シ或ハ悟ル所アリテ大ニ奮起ス
ルコト得ベキヤ必然ナレバ其利益實ニ甚大ナルベシ左
スレバ中央政府ガ憲政使ヲ派遣スルハ此一回ニシテ止マ
ズ今後必ズ毎年コレヲ全國ニ派遣シテ耳目ヲ聰明ナラシ
メ施政ノ方針ヲ定ムルノ大用ニ供スベキヤ疑ナク容レザル
ナリ
中央政府ガ内國ノ事情ニ關シテ其耳目ヲ聰明ニスルハ我
輩ノ甚ダ希望スル所ニシテ一日モコレヲ忽セニセザルコ
ト欲スルナリト雖モ我輩ハ此希望ト同時ニ其聰明ト明トチ
シテ今少シ遠大廣闊ナラシメ世界各國ノ事情ニ關シテモ
決シテ鑒官ノ如ク然ルコトナカランコトヲ希望スルナリ抑
モ我日本ガ今日ノ日本タルヲ得ル所以ノモノ并ニ今日以
後ノ日本ガ今日以後ノ日本タルヲ得ベキ所以ノモノモ決
シテ德川幕府二百五十年間ノ國情ノ如ク古キ貴ビテ新
シキヲ厭ヒ文恬武熙孔孟ノ古學ヲ空談シテ彈丸ノ小天地
ニ整居安坐スルガタメナラズ全クハ早ク文明ノ進路ニ就
テ世界ニ一歩ヲ讓ラント決心シ銳意進ム其目的ヲ達スル
コトアルヲ以テノミ若シ果シテ幕府ノ舊例ニ因襲シ内ニ安
ジテ外ヲ顧ミズ自カラ天下ノ樂國ト稱シテ獨リ高臥スル
コトアリタラントハ我日本國人ハ今日ノ此日本ヲ見ル
コト蓋シ六ヶ敷カレシ故ニ此上尙當代日新ノ文明ヲ知
リテ其採用ヲ怠ラズ世界各國ノ事情ニ通シテコレニ應ス
ルノ進路ヲ求ムルハ日本ノ日本タルヲ得ル所以ノ最要務ト
ルヘシ
今ノ日本ヲ取テコレヲ三十年前ノ日本ニ比較シ前後文明
ノ進否如何ヲ言ヘバ今日ノ文明ノ高度ナル固ヨリ論チ俟タ
ズ此文明ハ西洋ノ書ヲ讀ミ西洋ノ人ニ接シ或ハ自ラ西洋
ニ航シテ親シク其有様ヲ實見シ漸クコレヲ促カシタルモ
ノニシテ其進力ハ明治維新ノ後ニ至リ俄然其進キテ加ヘ
タルモノトス是則チ維新以後西洋ヲ知ルノ便利ハ其以前
ノ如ク不充ナルモノニアラザルガ故ニ然ルモノ凡ソ知
識ヲ得ルニ當テ讀テコレヲ知リ人ニ遇テコレヲ聞キタル
場合ニ於テハ其心ニ感スルコト甚ダ冷淡ニシテ永ク其進チ

留ムルヲ難シト雖モ一トビ其實物ヲ目撃シテコレヲ知リ
タル場合ニ於テハ其心ニ感スルコト深切ナル書ニ讀ミ人
ニ聞キタル折ノ比例コトアラズ是元ト人情ノ然ラシムル所
ニシテ所謂百聞一見ニ如カズトノ諺アル所以ナラン故ニ
日本ノ文明ヲ促カスニ當テ其力ノ及ブ所最モ廣闊ナルモ
ノハ讀書ナリト雖モ其深切活潑ナルモノニ至テハ洋行實
見ノ右ニ出ルモノナシ例ヘバ明治六年全權大使ノ一行ガ
歐米諸國ノ回覽ヲ終リテ歸着以來全國ノ人心ガ文明ノ風
潮ヲ追フニ俄ニ急速ニ食ルノ狀ヲ呈シタルガ如キハ其最
モ著明ナルモノト云フベキナリ
前條ノ次第ナルガ故ニ今我日本國人チシテ當代文明ノ貴
重ナル所以ヲ知ラシメコレヲ採用スルコト日モ亦足ラザル
ノ想アラシメントスルコトハ自カラ歐米諸國ニ渡航シ親シ
ク其實際ヲ目撃セシムルヲ以テ甚ダ肝要ナリトス然ルニ
野ニ在テ私業ニ從事スルノ人々ハ營業上ノ都合ニ由リ内
國ヲ去ルコト能ハザル者多ク或ハ隨分外國行チ爲シテ差支
ナキ人ナガテ旅行ノ費用ニ當感シテ止ムテ得ズ内國ニ留
マル者ニ至リテハ更ニ多數ナルガ故ニ目下在野ノ人ニ
シテ歐米諸國ニ旅行スル者其數尙ホ甚ダ僅小ナリ隨テ四
海ノ外文明諸國ノ事情ニ疎ク一身ノ損益ヨリ一國ノ大計
ニ至ルマデ爲メニ榮ル所ノ損失決シテ少小ナラザルナリ
蓋シ私ノ事ハ俄ニ強フベカラズトシテ漸クニ其正ニ就ク
ノ道ヲ求メテ可ナルベシト雖モ一國ノ公務ニ任スル政府
ノ如キハ決シテ然ラザルベシ荷モ世界ノ文明ニ後レズ獨
立國タルノ体面ヲ辱カシムルコトナカラントスルコトハ大ニ
其耳目ヲ聰明ニシテ飽クマデ世界ノ事情ニ通曉シテコレニ
應スルノ善圖ヲ爲ササルベカラズ否ヤレバ自家半睡睡眠
ノ間ニ世界ノ形勢ハ一變シ或ハ再三變シ長足ニ進行シテ
吾人待テズ一朝情眼ヲ破曉セラレテ卒爾ニ其怠慢ヲ後悔
スルモ遂ニ其罪ヲ贖フノ方便ヲ得ザルコトアルベシ故コト政
府ガ内國ノ事情ヲ知ラントスルニ當リ坐シテ地方ヨリ報
告ノ到ルヲ待テズ自カラ進テ全國ニ巡察シ以テ現時未來
ノ施政ノ方針ヲ定ムルノ計ヲ爲スハ能ク其義務ヲ盡スモ
ノト云ハザルヲ得ズ左スレバ又其耳目ノ聰明チ一層遠大
ニシ海外諸國ニ巡察使ヲ派出シテ其事情ニ通曉シ以テ日
本全國ノ幸福ヲ増進スルノ計ヲ爲スモ亦其義務ナリト云
テ不可ナカルベシ依テ我輩ハ日本政府ニ向テ大ニ外國巡
察使ヲ派遣センコトヲ勸告スルモノナリ

雜報

○北海道鐵道開業 彰仁親王(小松宮)黒田内閣顧問、大
山陸軍卿、井上工部大輔及内閣大書記官作間一介、大政官
大書記官小牧昌業の兩君が去明治十三年中起工に係る
北海道手宮より阿寒内陸鐵道全線五拾六英里半の鐵道本
年より竣功し来る九月十五日を以て開業式ヲ舉行する
○付右開業
日各仰付ル
○井上工部
(出張シ)
○川崎監獄
長は更ニ四
○金井大藏
○昨日昨日
○長轉轉
○長松村
○中野
○判士長
○板垣退
○ビンガ
○國公使
○魚谷
○パーク
○正午十二
○より皇族
○巡覽
○島國憲
明日迄延
○東京
(出張セ
ため伊豫
の兩氏ハ
○高等法
最初お辨
餘の陳述
河野星氏
辨論の遺
れば本論
時十分前
○局務代
○局長
○能